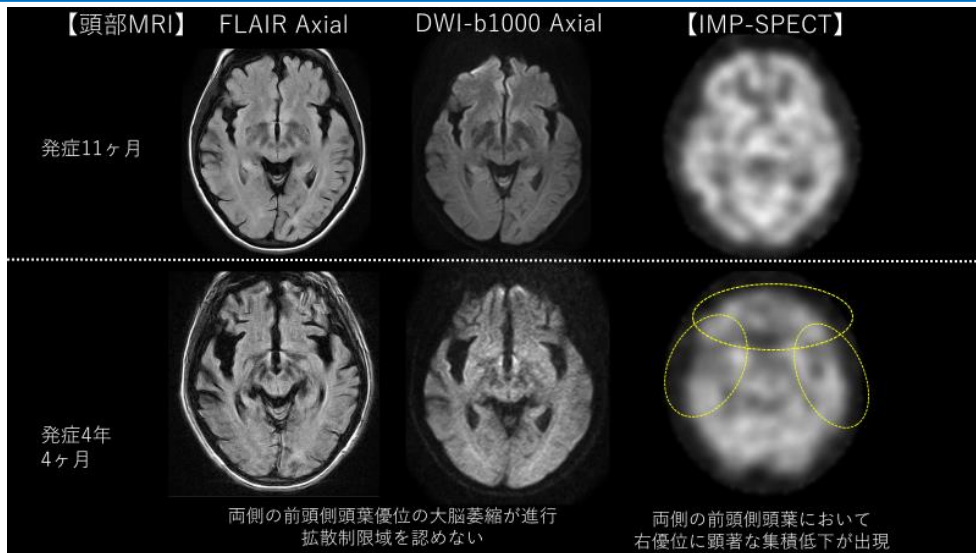


# プリオン蛋白遺伝子コドン105変異によるGerstmann-Sträussler-Scheinker 病 症例の脳血流SPECTの長期変化の解析

研究分担者: 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科脳神経病理態学  
(脳神経内科) 三條伸夫



## プリオン病における画像と病理の相関

	DWIでの高信号	SPECTでの血流低下
海綿状変性	○ sCJD10人の解析 <sup>1</sup> CJDV180Iの症例 <sup>2</sup>	○ CJDV180Iの症例 <sup>2</sup>
PrP <sup>Sc</sup> 沈着	△ sCJD10人の解析 <sup>1</sup>	○? GSSp105L PRP <sup>Sc</sup> の沈着+海綿状変性-の 部位にPET-CTで血流低下あり <sup>3</sup>

1. Manners DN et al. Neurology. 2009 Apr 21;72(16):1425-31.  
2. Mutsukura K et al. Dement Geriatr Cogn Disord. 2009;28(6):550-557.  
3. Yamazaki M et al. Acta Neuropathol. 1999 Nov;98(5):506-11.

## 解説

1. 本症例は、GSS-P105Lにおける脳血流SPECTの長期画像変化を解析した初の報告であり、脳血流SPECTで、頭部MRI上拡散制限のない前頭葉を主体とした領域に血流低下を認めることを明らかにした。
2. GSS-P105Lにおける、頭部MRI上拡散制限を認めない部位の脳血流SPECTでの血流低下は、海綿状変性のない領域にPrP<sup>Sc</sup>が沈着し、神経細胞変性がおきているという病理学的変化を反映している可能性が示唆された。